

## 注

- (1) 平岡敏夫『漱石序説』(昭和五十一年十月五日、塙書房刊)
- (2) 岩城之徳『啄木評伝』(昭和五十一年一月十日、学燈社刊)
- (3) 上田 博『啄木 小説の世界』(昭和五十五年九月十日、双文社刊)
- (4) 遊座昭吾『石川啄木の世界』(昭和六十二年三月三十日、八重岳書房刊)
- (5) 吉本隆明「啄木詩について」(『解釈と鑑賞』昭和三十七年八月号、至文堂)
- (6) 窪川鶴次郎『石川啄木』(昭和四十五年九月二十八日、弘文堂書房)
- (7) 小田切秀雄『石川啄木の世界』(昭和四十三年五月二十五日、新潮)
- (8) 今井泰子『石川啄木論』(昭和四十九年四月二十五日、塙書房刊)
- (9) (3) に同じ
- (10) (8) に同じ

(本稿は国際啄木学会、平成五年七月二十四・二十五日、北海道大会に於ける研究発表の一部、「啄木と釧路——「病院の窓」の世界」に加筆したものである)

かし、啄木の小説の中では『天鷲絨』と『道』の出来がよいという基本的な意見には賛成できる。

この二編が成功しているわけは、啄木の欠点であった構造がうまくいっているからで、それは『天鷲絨』の舞台背景は〈村〉と〈都會〉を、登場人物は〈古風な娘〉と〈現代的な娘〉を、『道』では〈旧世代〉と〈新世代〉を二極に対比的に配置したところにある。一人称体小説、主人公が自分という設定で思想を追求した小説は、啄木の自己肯定、顕示欲、ナルシズム、総じて「若さ」が出るが、対比的構造で客観的に描くことに徹した小説は、それを押さえることか出来るからであろう。つまり、二元的な構造である。初期論文「ワグネルの思想」以来の〈物心二元観〉、〈自己融合〉と〈自己発展〉、〈一元二元観〉という啄木の二元論的思考法は、小説の構造の中に生かされ、作品を成功に導いているということである。

## ○

近代文学史上に、谷崎潤一郎と芥川龍之介による「小説の筋論争」という論争があり、ここで、谷崎は小説の中心を〈構造〉に、芥川は〈描写〉に置き、論陣を張った。この論争によって、小説家啄木を照射すれば、彼は構成の作家ではなく描写の作家であった。その描写の的確さは、啄木が天性の詩人であったことによるが、構成のまずさは、才能の問題ではない。その理由は、経験がまだ浅いこと、時間がなくて構成を充分に練っていられず、また、全く推稿が出来

なかったこと、そして、小説作法を教えてくれる人がいなかったことによるであろう。評論、新聞記事、詩、啄木流短歌、小説の描写までは、見様見真似で身に付けることも出来ようが、小説の構成は、やはり多少は勉強し先達に教えてもらわねば出来ない。啄木の出発は『明星』で、友人や先輩など人脈は主に詩歌のほうにあり、小説の仲間はずれであった。敢て、その人を周辺に探せば、唯一、森鷗外で、啄木は『天鷲絨』を書き上げた夜、自宅を訪ね届けるが、留守であった。啄木は、小説を家の人に預け（明治四十一年六月四日記）〈暗い路をあるいてゐて悲しくなつた。久振りですいたので、フラフラする〉という思いで帰った。後日、森鷗外から丁寧な赤ペンの入った「天鷲絨」が送り返されて来て（つまり「天鷲絨」は鷗外が目を通しチェックしているということ）、啄木は大変に感激している。このとき、鷗外が自宅に居てくれれば、啄木自身で直に生活の窮状を訴え、小説の手ほどきを受けるようになれば、小説家啄木に不運はつきまといつた。啄木の小説作品は、或は失敗かも知れないが、しかし、小説の才能がなかったわけではない。小説創作のうち描写は才能だが、構成は勉強であろう。好意的に言えば、啄木は小説家としてもきらめく才能を持っていたが、時間（資本）と成熟していない明治の文学界と文化社会が、育ててあげることが出来なかつたのである。明治時代にも梶井基次郎が、村上龍がいた。惜しいことをした、もったいないことをした、と思われるのが小説家啄木ではないであろうか。

『道』は、いわゆる教師もので、教育会が三里遠くの小学校で開催されることとなり、老いた教師三人と若い教師二人が出かける道中、山道を歩きながらの会話を舞台としたものである。豊かな自然描写を背景に、風俗、家庭、文部省などを話題に〈旧〉〈新〉を比較しているが、次第に歩き遅れていく老人グループに人生をも象徴させ、若さへの問い掛けを狙ったものと思われる。独身女性として仕事に生きる矢沢松子と、最後に〈己はまだ二十二だ。——さうだ、たつた二十二なのだ〉とつぶやく主人公今井多吉。キャリアウーマン矢沢松子の苦悩に対する今井多吉のやさしい眼差しは、遠く現代を示唆しているとともに、ラストシーンの自己への問い掛けは、普遍的な若者への永遠の青年啄木からのメッセージとなっている。

この小説の構造は、言うまでもなく、〈老人〉と〈青年〉の対比的配置であり、設定自体が主題に、つまり、構造と思想が一致している作品である。また主人公今井多吉は、啄木の分身と思われるが、もはや、作者自身が極度に前面に出て、小説が破壊されるということとはない。そして自然描写は、相変らず巧みで、人事（会話）とが、はつきり分離しすぎて浮き上がっているところはあるが感覚的で優れている。またこの小説は、本質的には世代を描く描写小説で、会話や描写を通して心理を描写する内面描写の確立の可能性をかいま見せている。

この小説に対する作者の言及は、執筆直後に宮崎大四郎に宛てた手紙（明治四十三年四月十二日）に〈僕一流の徹底的象徴主義〉とあり、岩崎正に宛てた手紙（明治四十三年六月三日）に〈或る目的

を置いて書いた小説〉だが、その〈目的の置き処の誤まつてゐた〉、今度の作（筆者注『我等の一団と彼』）では〈老人と青年の關係に置いた目的を、もつと極限して現代の主潮に置いた〉とある。この象徴主義手法とは、冒頭に新旧を〈下駄〉と〈靴〉、〈和服〉と〈洋服〉という風俗に託したことや次第に山道を歩き遅れる老人達に時代を象徴させたことを示すのであろう。だが、啄木自身は氣に入らないらしいが、この象徴主義手法によって、小説がくどい説明となることが避けられ、含みを残し、読者に読み取らせる余地を与えている。それは、小説がよく形象化されてい<sup>9</sup>ないということではなく、作品の質を高めていると見るべきであらう。二つ目の書簡で『道』は、老人と青年を描く目的であったことがはつきりわかるが、二ヶ月後には啄木自身は、作品に満足がいなくなっている。その理由は、世代を描き出すことに中心を置いたため、描写のみに終止し、そこから思想を穿つまでは至らなかったということであらう。しかし、啄木がそのように自己評価したからと言って、一般的には描写の小説が悪く、思想の小説が良いということはなく、描写のみでも優れていれば作品は成り立つ。物語としては、『天鷲絨』のほうが新奇で刺激的でおもしろいが、構造の破綻のなさや心理描写という現代的小説性に於いては『道』のほうが完成度は高いと思われる。

『道』は、啄木の現代小説家への可能性を最も開示した作品であると言えよう。今井泰子<sup>10</sup>は〈啄木において小説の水準に達している作品は、思うに『天鷲絨』と『道』ぐらいなものである〉と評している。もう少し、小説全体に高い評価を与えてやる必要はあるが、し

のお細君さんなどに成れぬから、矢張三年行つて来るが第一だ」と思つて決意する。作者の二十歳前後の田舎娘が、都会の綺麗な女性に憧れる心情を穿つ眼は鋭く、男を媒介とした女同志の戦いに於ける複雑な心理を捉える作者啄木の奥ゆきは憎いほど深い。また従来『天鷲絨』に現われた娘の田舎者ぶりで有名なところは（バケツといふ物は見た事がないので）とか（キヤベージとは何の事か解らぬ）であるが、しかし、それ以外でも、娘達が都会に戸惑う新鮮さは随所に見受けることができる。例えば、都会の代表的な電車について、お定に（電程怖ろしいものはなかつた。線路を横切つた時の心地は、思い出しても冷汗が流れる。後先を見廻して、一町も向うから電車が来ようものなら、もう足が動かぬ。漸つとそれを遣り過して、十間も行つてから思切つて向側に駆ける。先づ安心と思ふと胸には動悸が高い）と言わせている。田舎者の眼を通して描いた電車、明治時代に於ける村と都市のギャップの大きさを風俗、心理描写に託して、感覚的にさりげなく表現している。

この『天鷲絨』を総合的に評価すれば、啄木は小説を書くとき、ひらめきの設定だけで、結末を全く想定しないで書き出すが、この小説は、設定の段階で結末も考えており、計算された構造のよさがある。しかも読後に思えば、当り前の設定から当り前の結果を引き出すのであるが、作者の素朴で単純な計算を読者に悟らせないだけの筆の力がある。方言を使用し夜這いという驚く慣習を素材としているというだけでなく、それはやはり、啄木の描写力の確かを示すものである。『天鷲絨』は、明治という時代にあつて、普通の女

の子が主人公となっている希有な小説で、これを田舎の若者が初めて接した大都会東京の風俗の描写ということに限定すれば、或は、漱石の『三四郎』より良く描けているかも知れない。これまでも、窪川鶴次郎<sup>(6)</sup>、小田切秀雄<sup>(7)</sup>、今井泰子<sup>(8)</sup>が、高く評価してきてはいるが、それでもなお注目されなかつたのは、近代小説が自我の確立に重点をおき、風俗という視点が軽んじられてきたこと、男中心、東京中心の文学であつたことによるであろう。前作の『菊地君』で「風貌」を、「病院の窓」で「心理」を描こうとした試みが、三作目の『天鷲絨』で成就したということであり、小説家啄木の成長を伺うことができる。

しかし欲を言えば、娘達の心理の捉え方は良いが、心理の描き方は、ややまだ外側からの記述的、説明的描写で、いわば心理葛藤を内側から微妙に描く、内面描写には今一步到達していない。その意味では、数年後に書かれた『道』（明治四十三年四月『新小説』）が注目される。この小説は、同人雑誌ではない公的な雑誌に発表された『鳥影』に続く、啄木の二つ目の作品であるが、発表以前に、素材と構想については日記や書簡などで全く語っていない。ただ『新小説』に掲載されたことと原稿料が入つたことがうれしかったらしく、日記（明治四十三年四月二日）に（昨日発行の新小説へ私の先々月の初に書いた『道』が載つた）と記している。また、金田一京助に手紙（明治四十三年二月十九日）を宛てて（『道』について中島氏の好意を得、翌日春陽堂に田舎の村長然たる後藤宙外を訪ねて金に代へ候）と書き送っている。

ているが、嘗て吉本隆明は「弁疏」を取り上げ、啄木は口語自由詩を（詩的な発想を散文（小説）的な発想にちかづけることによって）（詩的な発想から散文的・物語的な発想へ）という形で切り開いたと指摘した。これが出来たのは実際に、小説修業をしていたからで、つまり、啄木は小説創作に真摯に取り組むことによって、自らの口語自由詩を確立していったのである。

『病院の窓』の設定は、啄木自身にとって小説の登場人物の心理を描く良い練習の場となったと思われるが、それは続く、上京後第三作目『天鷲絨』（未発表）によってわかる。この小説の内容は、田舎の若い娘二人、おとなしく古風な性格のお定と明朗活発で現代的なお八重が、東京に憧れ奉公に上がる。二人の娘は、大都会の生活を経験し、一喜一憂するが、やがて親に連れ戻されることとなり、故郷に帰るといふものである。五月三十一日の日記に（『天鷲絨』の稿を起して、寝るまでに（一）八枚書いた）とあり、また六月四日の日記には（『天鷲絨』九十三枚遂に脱稿）（ランプをつけて、『天鷲絨』のしまひ一枚書き直して、九十四枚になる）とあるので、着筆から脱稿まで五日間であったとわかる。また着筆の日に、啄木は素材及び構想を（これは田舎から逃げて東京に出て、三日女中をして帰る女の事をかくのだ。予の閱歴とは無関係だが、其田舎をば洗民にした）と明かしている。

まず構造の側から考えれば、舞台背景を地方の村（『洗民』）と大都會（『東京』）に、登場人物を（古風な娘お定）と（現代的な娘お八重）というように対比的に配置している。啄木の言う通り、この小説に

作者の分身はなく、いわば外部視点で、全く客観的に描くことのみを徹しており、対照的な性格を持つ田舎娘の設定と最後の東京生活に対する二人の見解の相違から、大都會東京の生活を描き出している。ただ残念なのは、対照的な娘二人を配置しながら、作者の筆のウエートがお定にかかっており、お八重の場面が少ないことである。その理由を推測すれば、お定像のほうがお八重像より描きやすかったということ、また、書いているうちに啄木が、お定のほうを愛してしまっただけということが考えられる。だが、啄木の性格や私生活の女性観から言えば、静かなお定より活発なお八重のほうが好みであり、小説とは逆である。その点から、この二人の娘に対する作者啄木の意識は、男性としてでなく、郷土の先輩、もしくは教師としてのものとなる。いずれにしても二人の娘を、量、質ともに均等に描けばもつと優れた作品となったのであるが、しかし、それは啄木の力量と言うより時代の限界でもあろう。

描写の側から考えれば、明治時代の村と都市の風俗、男と女、地方人から見た東京と上京してからの実際の生活、それらに対する若い娘の心理が良く描かれている。例えば、積極的なお八重に東京行きを誘われ、消極的なお定が決意する切っ掛けは、（今日目を輝かして熱心に語つた美しい顔が、怎やら深く刻まれてるのは、実に其お八重の顔であった。怎してお八重一人だけ東京にやられよう！）ということであった。そして東京生活に夢を馳せつつも、なお迷うお定は（あの先生さへ優しくして呉れたら、何も私は東京などへ行きもしないのに、と考へても見たが、又、今の身分ぢや兎ても先生

いる。続く場面、編輯局の中は（日射が硝子の塵を白く染めて）とか、（赤インキの大きな汚染が、新しい机だけに、胸が苛々する程血腥い厭な色に見える）というようにある。これは、色彩を使い、赤のインキから血を連想させ、事実と心象風景を重ね合わせ、これからの展開を暗示するという方法である。また、野村良吉の身の上を語るところに（垢だらけの胸を披けて乳をやる母親は、鼻が推漬した様で、土に染みた髪は異な臭気を放つて居たが）というような描写があり、この場面はやがてくる民衆文学を髣髴とさせる迫力がある。描写は、もともと鋭かった詩人の眼が、北海道の自然や民衆に触れることによって、その力を増したと思われる。啄木の小説の文章には、五感（主に、音、光、色、触）がよく取り込まれており、この時代のどの作家より、外からの描写ではあるが、感覚的である。全体的に荒つぽさを残す筆致であるが、この小説に限り、釧路の厳しい自然と主人公の荒んだ心象世界を描くという目的に於いて肯定されなくもない。

現在、この小説について岩城之徳<sup>(2)</sup>は、前述のように、事実の側からモデルを背景として考証しているが、読みの側から上田博及び遊座昭吾が、新しい見解を示している。上田氏は「佐藤衣川」の性格を書く」という虚構を通して、啄木が釧路時代後半に自ら抱え込んでいた倫理的主題を形象化しようとした<sup>(3)</sup>と言う。また遊座氏は、啄木は「自己を一方で竹山に投影させ、一方では主人公にも多く投影させている」（佐藤衣川がモデルの野村の性格を徹底して描き、かつ作中の竹山になってそれを徹底して客観視するという手法を採

りながら、実は自己の極限の姿、可能態を告白的に描いた」と述べている。

この小説に於ける、事実と読みの側からの作品評価の相違について考察すれば、多分、啄木が構想を練ったとき、設定、着筆の段階では、事実（モデル）そのまま佐藤蔵の私生活をやや暴露的に穿つことにあつたであろう。しかし、出来上がった作品からは、主人公野村良吉と脇役竹山静雨の相方に啄木の分身が認められるというのは、最初から計画的に行われたのではなく、書き進めていくうちに筆が流れ、主体が動いて野村良吉に自己投影してしまった結果と思われる。啄木の手法は、比較的単純で、事実の奥に虚構を配するという意図的な手の込んだものではない。また野村良吉は、最後に自らの人生の影に脅え（神様、神様）と叫ぶが、この後に書かれた散文詩「曠野」（明治四十一年七月『明星』）は、曠野にひとり（路に迷ったのだ）という旅人が、人なつかしく擦り寄って来た野良犬を虐殺、最後は「俺の来た路は何方だつたらう?!」と大声で泣く。この二つの作品は、主人公が人生の途方に暮れている荒れ果てた心象風景を主題としているという意味で類似している。「病院の窓」の後半部の野村良吉の荒んだ心は、小説執筆の苦悩と愛児京子の病いという私生活が相俟つての、現在の自己啄木（小説執筆時）であろう。作品では、日記や書簡に書いているより、野村良吉に好意的というものは、この自己投影が起きたからで、それは結果的には勧善懲悪にならずにすみ、偶然と思われるが作品を良くしている。

また、このとき啄木は小説と口詩自由詩・散文詩を並行して書い

釧路共立笠井病院の薬局助手梅川ミサオが訪問して来て語ったことが（昨夜衣川が病院に来て飲んで、十一時頃梅川をつれ出した。巖嶋神社へ行つて口説いて、アハヤ暴行に及ばむとしたのを、女は峻拒して帰つて来たのだといふ）と記されており、そのときの感想を（衣川は慙むべき破綻の子、その一身の中に霊と肉とが戦つて、常に肉が勝利を占めて居る男）と綴っている。この日記の出来事は小説の中では、中盤の展開の部分、診察所で野村良吉と看護婦梅野が揉み合う場面として生かされており、従つて、小説中の看護婦梅野は、笠井病院の薬局助手梅川ミサオということになる。また啄木自身は、これらの出来事を冷静に見すえている編集主任竹山静雨という脇役の立場を取っている。この小説に於ける作者の意図は、脱稿後であるが宮崎大四郎（明治四十一年六月八日）に宛てた書簡でわかる。そこには（これは釧路新聞の佐藤といふ男（催眠術の先生）をモデルにしたのにて、肉霊の争ひ胸中に絶ゆる事なく、下り坂一方の生活のため廉恥心なくなり、朝から晩まで不安である人間を描き候）とある。参考までに、主人公野村良吉は催眠術使いということになつているが、明治四十一年四月十日から四月十八日にかけての『釧路新聞』に「催眠術の話」という記事が、玄々居士の筆名で掲載されている。続いて、小説執筆中の作者の私生活の出来事であるが、明治四十一年五月二十四日の日記には（枕元に白いきものを着た人が立つて居る。それは貞子さんであつた）とあり、そして（遙かなる海の彼方の愛児が死に瀕しているといふ通知）を受け、小説を書く日ではないと（予は三時頃までに「小さき墓」「白き窓」「何

故に」「泣くよりも」「白き顔」「嫂」「弁疏」「殺意」の八篇の詩を書いた）とある。つまりこのとき啄木は、植木貞子の再三の訪問を受け、また、函館に残した愛児京子が病いに伏すの報に接し、その苦しみから逃れるため口語自由詩を書いているということである。

啄木は上京後、まず『菊地君』を執筆することを計画、そこでライバル北東新聞社記者の菊地武治をモデルとして、主人公の「風貌」を描くことを試みるが、気にいらず途中で『病院の窓』に着手、主人公の「心理」を描くことに切りかえたのである。この小説を構造の側から見れば、『雲は天才である』は、主人公が語り手で作者であるが、『病院の窓』は、主人公は他人で脇役が作者というスタイルを取っており、これは脇役の眼を通して主人公を突き上げるといふ方法である。この小説の設定理由には、事実（モデル）がそうであった、『雲は天才である』（主人公＝自分）の失敗を考慮した、漱石の『吾輩は猫である』の構造に学んだなどが考えられる。作品では、日記や書簡で言っているほど、佐藤巖を悪く書いておらず同情的であるが、啄木の小説全般に対して言える、いらない登場人物や場面があり、筋を進めるに性急であるという欠点はここにも出てくる。

描写の側から見ると、例えば、冒頭は雪の街を歩いて主人公が出社する場面であるが（街々の雪がザクザク融けかかつて来たから、指先に穴のあいた足袋が気持悪く濡れて居た）とか、（暖炉に自暴に擦り付けると、シユツシユツと厭な音がして、変な臭気が鼻を撲つ）（森閑として居る）というように、触覚、聴覚、嗅覚に訴えて

啖呵を切るというものである。この小説を執筆する前に、啄木は『雲は天才である』を取り出して見ており(明治四十一年十月一日日記)、その意味でも、もちろん内容的にも『足跡』は、『雲は天才である』の続編または結末部に当る作品と考えられる。それは明らかで失敗作で、例の中村星湖(明治四十二年三月「小説月評」『早稲田文学』)の〈誇大妄想式の主人公を書くのは好い、作者まで一緒になつてはたまらない〉という痛烈な批判に晒されることとなった。仲間との同人誌であり、この批評は、小説に意欲を燃やす啄木にとって大変なショックであつたと思われる。啄木の小説は、半分が生前未発表であるが、悪い作品が発表され優れた作品は比較的発表されておらず、啄木自身が、小説を理解していないところに責任はあるが、これはひとつの小説家啄木の不運でもある。因に、後で触れるが『雲は天才である』には、のんびりとした田舎の学校の風情を出す時計の音と慌しい教務室の雰囲気を出すためのソロバンの音とが入っており、効果を上げている。また、平岡敏夫は『坊ちゃん』と『雲は天才である』を比較して(一方は断絶であり他方は連帯をかたく信じている)と指摘しているが、この相違は、単純に〈中年〉と〈若者〉の差でもあり、また漱石は東京という〈大都会〉、啄木は洪民という共同体(村)の出身であるということも考えられる。以後啄木は、洪民村で『葬列』を書き、北海道函館に新天地を求めて渡ると同時に『漂白』を書き、そして、札幌、小樽、釧路を点々としながら新聞記者の経験を積んだ。北海道では、自然の厳しさとともに複雑な人間関係から社会の厳しさをも教えられ、人間として

はもちろん男としても充分に鍛えられた。明治四十一年四月に啄木は、一年間の北海道生活に終止符を打ち、家族を函館に残し、再度文学生命を賭けて上京、森鷗外(明治四十一年五月七日付)に〈今一度、是非に今一度、東京に出て自らの文学的運命を極度まで試験せねば〉と手紙を送った。上京後には、生活のためと渴望していた文学意欲によって精力的に小説執筆に取り組み、一ヶ月余りで、なんと『病院の窓』『菊地君』『母』『天鷲絨』『二筋の血』の五編、約三百枚を書き上げた。

これらの小説のうち、『病院の窓』『菊地君』は執筆時期が相前後しており、内容的には釧路の友人を描くということでも共通している。上京後の第一作品『病院の窓』の素材は、釧路新聞社生活であり、明治四十一年一月二十二日に初出社した啄木は、旧知の岩手県出身の友人佐藤巖(衣川)が、三面記者として務めていたことに驚く。当日の日記には(驚いたのは、東京で同じ宿に居た事のある佐藤巖君が三面の記者になつて居た事で、聞けば同君は此処に来てから料理店の出前までやつたとの事)とある。この佐藤巖が、『病院の窓』の主人公野村良吉のモデルで、啄木は日記(明治四十一年五月十八日)に(「菊地君」は、余り長くなるので筆を止めて今日新たに「病院の窓」の稿を起す。釧路の佐藤衣川の性格を書くのだ)と記している。またこれにより、着筆は五月十八日で、五月二十六日の日記には(「病院の窓」九十一枚、午後三時半少し過ぎ脱稿)とあるので、この小説は着筆から脱稿まで八日間ということがわかる。そして、釧路生活時の日記(明治四十一年三月二十二日)には、啄木の宿に



革命の大破壊を報ずる暁の鐘である。主人公は自分で、奇妙な人物許り出てくる」と明かしている。この〈鬱勃たる革命的精神〉とは、藤村の『破戒』の広告文（明治三十九年三月『新小説』）に〈鬱勃たる新興の精神を以て前篇を貫きたり〉とあり、また、『破戒』（第十八章の五）に〈鬱勃とした精神〉と出てくる。このときの啄木の小説に対する概念（明治三十九年七月二十七日付佐々木理平治宛書簡）は、〈蓋し詩人の一切の武器のうち、小説ほど白兵戦の突撃に有効なる武器はなければなり〉と言うものであった。

例えば、坪内逍遙『当世書生氣質』『小説神髓』、二葉亭四迷『浮雲』『小説総論』、森鷗外『舞姫』出現の約二十年後のことである。その理論支柱となった坪内逍遙は『小説神髓』で、小説を芸術に高めること、写実の確立、勧善懲悪物語の否定を提唱した。この小説論から言えば、二葉亭の『浮雲』は、主人公の心理世界こそよく描かれているが、構造の側からみると、内海文三を肯定的に本田昇を否定的に設定して書いている。また、漱石の『坊ちゃん』についても、ユーモア小説という側面もあるが、やはり、主人公坊ちゃんと同風は肯定的に、赤シャツは否定的に取り扱われている。さらに『破戒』も、主人公の心理葛藤はよく描かれているものの、構造という点から見れば、主人公瀬川丑松、市村弁護士、猪子蓮太郎、風間敬之進など善玉グループと政敵高柳、校長、甥の勝野文平という悪玉グループとはつきり分れている。これら近代の代表的な小説は、主人公の心理葛藤の描写には成功しているが、作品の設定、構造には、未だ勧善懲悪物語の名残りがあり、その小説の近代性は、主人

公が、現実に破れて身を引いていくという結末の取り方にある。実に、この点で啄木は、漱石に〈偉大〉がない、藤村に〈革命の健児ではない〉と言ったのではないか。啄木が『破戒』に感動したのは、社会問題を扱ったところであり、告白的要素まして血統や宿命などというテーマではなかった。啄木は『破戒』の最後の場面、瀬川丑松が生徒に身の上を明かし謝り、テキサスに行くという結末が不満で、自ら小説を書いて結末を力強く突き抜けてやろうと考えたのであろう。そういう意味に於いて『雲は天才である』の構想を〈破天荒〉なものと言ったのであり、従って、当時の啄木の小説観は〈革命精神〉〈革命の大破壊〉〈白兵戦の突撃に有効なる武器〉となるのである。

啄木が、漱石や藤村に対抗するつもりで書いた処女小説『雲は天才である』の内容は、校長と郡視学を相手に生徒とともに奮闘する青年教師を描いたもので、その結末は、免職になっても決して精神的には屈服することなく、堂々とした態度を取ることを表明し中絶している。啄木は、前掲の日記で〈主人公は自分で〉と記しているが、これは、言うまでもなく浜民村の代用教員生活時の体験を作品化したものである。だが、この小説の主人公が自分という設定と結末の取り方には、少し間違えれば通俗小説、勧善懲悪物語になる危険性があり、数年後に東京に出てから書いた小説『足跡』（明治四十二年二月『スバル』）が、その事実を暗に示している。この小説は、やはり教師もので、結末は、青年教師が解職届けを提出し校長が困惑し引き止めるが、本人は自分はこんな所でうもれる器ではないと

# 小説家啄木の可能性

— 構造と手法から —

小説家啄木の評価は、今もなお低く、啄木の小説は読めたものではない、小説家としては失敗であり、敗北であったというものが多い。確かに啄木の小説は、未熟で拙く完成した芸術と呼ぶには遠いものかも知れない。しかし、啄木の小説の何処が悪いのか、良さはないのか、何是に小説というジャンルだけが失敗であったのかについて探ってみる必要がある。また仮に、作品自体が不十分なものであったとしても、作家研究の側に立てば、学歴も時間（資本）も師匠も持たない青年が、明治という時代に、全く独自に小説作りに挑んだ姿、無名青年の小説家への試みの軌跡を辿るといふ視点もある。或は作家論の立場で、内側からやや好意的に読み取ってやれば、興味深い小説家となるのではないか。小説作品と小説家啄木の未熟さと才能を分析し、成功へのポイント、可能性を大胆に考察してみることにする。

伊藤 淑人

○  
周知のように啄木が、小説家を志望するようになった直接の動機は、洪民村代用教員時代、農繁期休暇を利用して、明治三十九年六月十日から十五日間、千駄ヶ谷の新詩社に滞在、漱石、藤村らの小説を読んだことによる。その時の感想を、日記（明治三十九年・洪民日記・八十日間の記）に〈夏目漱石、島崎藤村二氏だけ、学殖のある新作家だから注目に値する〉〈夏目漱石は驚くべき文才を持つて居る。しかし「偉大」がない。島崎氏も充分望みがある。「破戒」は確かに群を抜いて居る。しかし天才ではない。革命の健児ではない〉と記し、自らも〈愈々小説を書くのだ〉と決意した。七月になってから『雲は天才である』に着筆することになる啄木は、その構想を同じ日記で〈これは鬱勃たる革命的精神のまだ渾沌として青年の胸に渦巻いているのを書くのだ。題も構想も恐らく破天荒なものだ。